
沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

明智 ひな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

【Nコード】

N4081Z

【作者名】

明智 ひな

【あらすじ】

東京都内某所にある、古びたオフィスビル。

そこに暮らす青年“沢内啓輔”と、その娘“優”の元へ、一人の女子高生が訪れる――。

彼女を苦しめる輩を、啓輔は突きとめる事ができるのか!?

はじめまして、明智ひなと申します^^お暇なときにでも、覗いていただけると幸いです♪

第一話

都内某所。古びたオフィスビルが立ち並ぶ一角に、彼は居る。

それは、一見普通の個人経営会社。精々数名の社員が働く、小さな会社だ。

ゆえに、此処を訪れる誰もが、最初に疑問を抱くという。

ここは本当に、数々の難事件を解き明かしたという、沢内探偵のいる事務所なのか――？ と。

狭い事務所のドアを潜ると、いつものように、強い煙草の匂いが鼻をつく。

長年過ごしていても、どうしても慣れないその空気に、優は顔をしかめた。

出入り口に繋がる応接室におり、悪臭の原因となっているのは、二十代中頃の青年。

室内の割合を大きく占める、ゆったりとした長椅子に腰かけながら、紫煙しえんをくゆらせている。

「もつつ……。パパ、また煙草？ 事務所が臭くなっちゃうよ？」

「ん、ああ、優か。おかえり」

「おかえり、じゃないでしょ！」

青年——此処の事務所の主である沢内啓輔は、愛娘の姿を認める
と、まだ長いままであつた煙草を、無造作に灰皿に押し付ける。

そうしてにこりと微笑むが、優に冷やかな視線を返されるだけで
あつた。

「冷たいなあ……ほら、早く手洗ってこい。今日のおやつはシュー
クリームだぞ」

「本当！？ パパグッジョブ！ ナイス！」

おやつのおやつの事を示唆されると、途端に優の顔がぱあっと明るくなる。
しかもシュークリームは少女の大好物なのだ。

優は慌てて手を洗いに、ぱたぱたと奥の部屋へと向かう。

そんな少女を目に追いながら、啓輔はやれやれと肩を竦めるのだ
つた。

啓輔のたった一人の愛娘である少女、優は、今年小学校にあがつ
たばかりの一年生だ。

そのくせ、探偵の娘であるという事に誇りを持っているのか、父
親の真似事をして、推理小説やら、六法全書なんかを読み漁ってい

る。

テレビを付けければ、ニュースチャンネルや、渋い刑事ドラマなんかばかり見ている。

……とまあ、一般的な少女達と比べると、少々変わった趣味を持った六歳児なのであった。

「パパ！ 手、洗ってきたよ！」

ぱたぱたと優が駆け戻ってくる。余程楽しみなのだろう、目がきらきらと輝いている。

こついう所は、まだまだ子供なのだった。

「はいはい。それじゃ、ここで大人しく待ってるよ」

先程との温度差に苦笑しながら、啓輔は長椅子から立ちあがるのがだった。

やがて啓輔の持ってきた包みは、銀座でも有名な店舗の物。

普段の食卓には絶対出て来ないような高級品に、優は目を丸くした。

そして、いつもより若干上擦った声で問いかける。

「こ、これって、洋菓子アミラの銀座本店限定高級シュークリーム

だよね！？　どうしたの、パパ？　こんな高級品」

「お前、おやつのことになると妙に詳しいな……ほら、輪島さんから貰ったんだよ。お前も覚えてるだろ？　この前の事件の依頼人。娘さんと一緒に是非——だつてさ」

「輪島さん？　……ああ、あの恰幅の良いお爺さんか。勿論覚えてるよ！」

瞳を伏せながら思案すると、すぐに思い当たったらしい。

すっきりしたような顔をしている。

「あの人、資産家だろ？　お前がシュークリーム好きだつて教えてもら、贈ってくれたみたいだぞ」

「な、成程……」

かつて彼の依頼人であつた輪島という男の邸宅は、確かに豪勢だった。

庶民である二人には高級品でも、彼にとっては、安い買い物なのだろう。

と、このように、小さい事務所に住まいながらも、輪島のような金持ちの客は数多い。

それほど、この事務所の評判は良かった。

客にとっては、少しくらい依頼料が高かろうと、名探偵の力添え

があつたほうが良いに決まっている。

それらは全て、若くして聡明^{そうめい}な啓輔の努力の賜物^{たまもの}だった。

実際、初めて彼を見た時の依頼人の反応は大きい。

こんな若造に本当に解けるのか？ などという言葉を投稿かける者も多いのだ。

「……優？ 何ぼけつとしてるんだ？ 早く食わないと、俺が食つちまうぞ」

「え？ あ、ああ……うん」

父の訝^{いぶか}しげな視線を受け、優は目の前のシュークリームに小さく噛みついた。

途端、口中にクリームの甘味が広がる。サクッ、という音と共に、口の中でシューが溶けた。

さっぱりしすぎず、しつこくない甘さは、確かにそれが高級だという事を示していた。

甘いものはあまり得意でない啓輔も、薄らと目を細めている。

どうやら、彼のお眼鏡にもかなったらしい。

「結構旨いな。これ」

「そりゃ、スイーツ業界の中では、幻とまで呼ばれるシュークリー

ムだもん！ 美味^{おい}しいに決まってるよ！」

「ふーん。……ま、いつか機会があったら、また食べような」

「うん！」

いつの間にか、辺りには和やかな空気が流れ出す。

そんな時、来客を告げるインターホンが鳴った――。

第一話（後書き）

はじめまして、明智 ひなと申します^^

まだまだ駆け出し中の身で、駄作ばかりですが（汗）

読んでいただけるとうれしいです！

第二話

「ア、アポイントメントも取らず、急に押しかけてしまい……本当にすみません！」

本当に申し訳なく思っているのなら、早く用件に入ってもらいたいものだ——と、啓輔は心の中で毒づいた。

先程訪れた来客は、未だ年若い少女。速水菜々——都内有数の進学校に通う高校生と言っているが、普通の学生がこんな時間帯に居る筈もない。何か訳ありなのは、一目瞭然だ。

顔立ちは中々整っており、同じ年の頃の少年達からには人気があるのかもしれないが、生憎啓輔にその気は無い。

別段他に仕事があるわけでもないのだが、用件を話す訳でもなく、こつ謝られてばかりいるだけでは埒があかない。

正直、かなり迷惑だ。

そんな態度が表れてしまっているのだろうか。少女は、先程から恐縮してばかりだった。

「——ええと、お嬢さん。別に、怒っていませんから。そんなに、謝らなくても……」

「あ、えつと、す、すみませんっ！」

「……」

啓輔は心の中で、小さく溜息をついた。

と、そんな時――。

「あの、お姉さん……」

「ひゃっ！」

優がやってきた。

手には、お客様用のティーカップに淹れられた紅茶と、クッキーを載せたお盆を持っている。

「よろしければどうぞ」

そう言うてにこやかに営業スマイルを浮かべる優は、とても小学一年生には見えなかった。

実父である啓輔ですらも、あの、笑顔でシュークリームを頬張っていた少女と同じ人物だとは、信じがたい。

そう思つのは菜々も同じらしく、目を白黒させていた。

「え、えっと、この子は一体？」

「娘の優です。優、ご挨拶なさい」

「はじめまして。沢内啓輔の娘、優です。以後お見知りおきを」

「は、はじめまして。速水菜々です」

優がお盆を机に置き、菜々に手を伸ばす。

握手を求められているのだと察すると、菜々も、慌てて手を差し出し、手を握り返す。

「緊張しないで大丈夫ですよ。パパ、秘密は絶対守ってくださいから！」

普段は絶対使わないような言葉使いと微笑みで、依頼人の緊張を解く。

優もまた、沢内探偵事務所を経営する事において、かかせない人物だった。

「ん……そ、それじゃ、そろそろお話しさせて頂いても、宜しいでしょうか？」

「あ、はい。お願いします」

口が重かった彼女にも、ようやく決心がついたようだ。

伏せていた顔をあげ、真っすぐに啓輔を見据える。

その瞳には、怯えの色が滲^{にじ}んでいた。

「実は私——ストーカーに遭っているみたいなんです」

菜々は、ゆつくりとそう言った。

啓輔が口を開いたのは、少女の告白から、たっぷり三拍ほどおいた後の事だった。

明らかに困ったような口ぶりで、少女に問いかける。

「……えっと、ストーカーって、あのストーカーですよ？」

「は、はい。特定の人に執拗につきまとう、あのストーカーです」

「……」

啓輔は、相手に気付かれない程度に眉根を寄せる。

確かに此処は探偵事務所で、探偵もいる。

しかし、“探偵”と一括りに言っても、その種類は様々だ。

頼るなら、警察やらもつと良い専門の探偵事務所があるだろうに——と、啓輔は、心の中で溜息をついた。

……いや、仕事にケチを付けるのは、宜しくない。

「や、やっぱり、天下の名探偵さんに、こんな事を依頼しちゃ、失礼ですよ……すみません」

啓輔のささやかな変化を感じ取ったのだろう。

菜々は、再び瞳を伏せる。気のせいか、目元には薄らと涙すら滲んでいる……。

幾ら年を食っているとはいえ、啓輔も男。

自分のせいで、少女を涙目にさせてしまった事に、ちくりと良心が痛んだ。

心なしか、近くで控えている優からも、冷やかな視線を感じる。

「ほ、本当にすみませんでした。……私、やっぱり失礼しま——」

「待つて！」

菜々が席を立とうとすると、それを制する声が聞こえる。

……優だった。演技なのか知らないが、目元が潤んでいる。

「大丈夫です！ ストーカーなんて女の敵、絶対にパパが捕まえてくれますっ！ だから、泣かないで下さいっ！」

「もう、いいんです。ありがとう、ございました」

そう言いながらも、菜々は未練がましい瞳で、啓輔を見つめる。

優の視線が、更に陰しくなるのを、啓輔は感じた。

重たい沈黙と良心の呵責に耐えられず、啓輔は半ば諦め半分で頷いた。

「……分かりました。私なんぞで宜しければ——」

「やった！ 菜々さん、パパ、引き受けてくれるそうです！」

「本当ですか！？ あ、ありがとうございます……」

その途端、二人の表情が綻^{ほころ}ぶ。

……まさか、演技？ 二人の突然の変貌^{へんぼう}に、啓輔は、そう思わざるを得なかった。

「それではまず、少し質問をさせていただきます。優、お前は下がっていないさい」

「はい」

純真無垢な笑顔を浮かべながら、優は奥の部屋へと入っていく。

守秘義務^{しひぎむ}と言う奴だ。一応、被害者のプライバシーは守っているつもりらしい。

尤も^{もつと}、張り込みやら何やらにはついてくるので、あまり意味はないのだが。

優が奥の部屋へと戻るのを見届けた後、啓輔は、菜々を見つめる。

その表情は、先程とは打って違って、真剣そのものだった。

第三話

菜々に初めての彼氏が出来たのは、二週間ほど前の事だった。

相手の名は松浦秀樹。まつうら ひでき陸上部の主将で、男女問わず人気者だ。

菜々の一目惚れから始まって、早数年。

秀樹からの告白で、菜々の片想いは終わりを告げた。

内気な彼女にしては、中々上出来といえるだろう。

二人は、幸せいっぱいの日を送るはずだった。

そう。あの出来事さえなければ。

悪夢の始まりは、二人が付き合い始めた翌日の朝。

菜々が、学校に登校して来た時の事だった――。

「菜々、おはよ！」

「あ、ことちゃん！ おはよ」

学校の校門前。菜々は、親友の塚本琴音つかもとことねに声を掛けられた。

琴音はいつもより明るい笑顔を浮かべながら、菜々を見やっている。

それも無理はない。

菜々の恋を誰よりも応援してくれたのは、他でもない、彼女だったのだから。

「菜々、昨日は本当おめでと！ お幸せにね！！」

「あ、ありがと……」

そう言いながら、菜々は小さく俯く。恥ずかしいのか、顔は真っ赤に染まっていた。

「そういえば、朝は一緒じゃないの？ 昨日は、あんなにラブラブに帰ってたくせに！」

「も、もう、そんなんじゃないよ！！ ほら、秀樹君って陸上部じゃない。朝練早いから、朝は一緒に行けない、って」

「成程、ね。菜々なるはつたら、めっちゃ愛されてるじゃん！ うらやましいね」

「ち、ちが……そんなんじゃないって！」

「あはは。ゴメンゴメン」

そんな他愛ない話をしながら、二人は玄関へと入っていく――。

それは、どこにでも売っているような、普通の茶封筒ちやふうとうだった。

ラブレターにしては随分色気のないそれを見た時、菜々は思わず眉を顰ひそめてしまう。

そんな菜々の様子に気付いたのだろう。琴音が、いつもより少し不安げな声で、問いかける。

「どしたの？ 菜々、その封筒……」

「分かんない。何か、下駄箱に入ってたの」

「ふーん」

琴音にも、それがラブレターには見えなかったらしい。

思わず二人して、封筒をまじまじと凝視ぎょつししてしまう……。

「——何、入ってるんだろ？」

「そんなに厚みがある訳でもないしね」

菜々は訝しげに封筒を開ける。中には——一枚の、紙が入っていた。

封筒と同様、色気の欠片もない真っ白な紙。

三つ折りにされているのか、傍目^{はため}では、何が書いているのかはうかがえなかった。

カサ……。菜々は、恐る恐る手紙を開ける。

何か、嫌な予感がした。

「えっ！？ な、何よ、これ……」

「嘘^{うそ}、でしょ……？」

菜々は、怯えた顔で親友を見やる。

紙面に刻まれているのは、ワープロで打たれた赤い文字。

そこには、“松浦秀樹と別れる”と、書かれていた――。

気が付くと、菜々は泣いていた。

余程辛かったのだろう。肩が小刻みに震えている。

「それを見た瞬間、私、もう頭の中が真っ白になっちゃって……。彼が人気者で、こういう事はある、っていうのは分かっていたんですけど――」

「……脅迫状^{しやうぱくじやう}、ですか。それだけでも、充分犯罪ですね」

それを聞きながら、啓輔は内心身震いしていた。

女というのは、些細な嫉妬心でも、ここまで残酷になれるものなのだ——と。

その内優も、こんな恐ろしい事をしでかさないだろうか、という考えが頭を過る。

いや、あのお気楽少女に限って、そんな事……。

「さ、沢内探偵？ どうされたんですか？ 顔、真っ青ですけど……」

「——いえ、すみません」

啓輔は一つ咳払いをし、馬鹿な考えを頭から追い払う。

依頼人を信じる筈の探偵が、自分の娘を信じられなくてどうするのだ——。

「被害は、他にも？」

「は、はい。……こんなの、まだ、序の口だったんです」

そう言つと菜々の表情が再び暗くなる。

一度は止まったかと思われた涙が、再び戻ってきたようだ。

瞳の淵には、雫が溜まっている。

「………本当の悪夢が始まったのは、その晩からの事でした——」

その晩、菜々は落ち込んでいた。

どこか様子のおかしい菜々を、秀樹も色々と気にかけてくれたのだが、まさか当時者に相談するわけにもいかない。

訝しげな彼の言葉にも、曖昧あいまいに微笑むしかなかった。

「あたし……どうしよう」

菜々は、自室のベッドに飛び乗り、盛大に溜息をつく。

自分は、れっきとした彼女なのだ。

脅迫なんかに怯まないで、堂々としていればいい。

分かつてはいるのだ。……ただ、そう振舞ふるまうのは、内気な菜々には中々難しい。

もしかしたら、自分は彼に相応ふさわしくないんじゃないか——とまで、思ってしまう。

菜々は思考の悪循環に陥っていた。

と、そんな時。

部屋中に、聞き慣れたケータイのコール音が鳴り響く。

菜々は慣れた手つきで、通話ボタンを押した。

「もしもし、菜々ですけど」

「――」

「え？ すみません。もう一度お願いします」

相手の言う事が、いまいち聞き取れない。

電波の状況が悪いのかと思い、一度アンテナを確認するが、きちんと三本立っている。

「もしもし。どちら様ですか？」

「――」

それでも電話は、うんともすんとも言わない。

きちんと通話時間が表示される事から、壊れている訳ではないらしい。

「……もしもし？ 貴方、一体――」

ブチンッ！ 突如、乱暴に電波が途切れた。

どうやら相手が切ったらしい。全く、一体何の用だというのだ……。

「もう、一体誰が……っ！」

かけなおそうと、着歴を見た時、菜々は、背筋が凍るのを感じた。
非通知。受信歴には、そう刻まれている。

菜々はようやく、それが無言電話だったのだと気付いた――。

第四話

無言電話に脅迫状。

昨日起こったばかりの出来事で、菜々の頭はいつぱいになっていた。

今日も、昨日と同じくらい——いや、昨日より酷い気分だ、と菜々は思う。

この事を、秀樹に相談しようと、何度考えたことだろう。

しかし、ただでさえ陸上部主将という立場で、ストレスを抱えているというのに、さらに心配事を増やしてはいけないだろう……という複雑な思いから、どうしても言いだせないのだ。

「——み、速水。呼ばれてるぞ」

「……え？」

隣から困ったようなクラスメートの囁き声ささやが聞こえ、菜々は今、授業中だという事を思い出す。

前を見やると、厳格な事で評判の数学教師、青木あおきが頬を引きつらせている。

それを見た瞬間、菜々は一気に現実に戻された。

「速水。何、ぼけっとしているんだ？」

「す、すみません！」

慌てて謝るが、彼は相当ご立腹のようだ。目が全く笑っていない。

「余程俺の授業が退屈らしいな。いい度胸だ、速水。この後、職員室でゆつくり先生とお話ししような」

青木は、“ゆつくりと”の部分を特に強調して言った。

昼休み。菜々がこっぴどく叱^{しか}られた後、職員室を出るとそこには見慣れた姿があった。

……秀樹だ。

壁^{かべ}に寄りかかってどこか遠くを見る様な目をしていたが、菜々が帰って来た事に気付くと、ゆつくりと視線を向けた。

「秀樹君？ どうしたの、こんな所で……」

「ん、ああ。菜々が、青木に説教くらってる、って聞いてさ。どうしたのかな？ って思ってた」

そういいながら秀樹は、にかつと爽^{さわ}やかな微笑みを浮かべる。

昨日の事も含め、少しブルーだった菜々にとってその笑顔は、とても安心できるものだった。

「昼、まだだろ？　一緒に食べようぜ」

「え？　秀樹君、お昼まだなの？　だって、もう昼休み始まって、随分経つよ……」

現時刻は、一時過ぎ。昼休みが始まって、三十分ほど経っている。

流石に、この時間までお昼抜きは辛いものがあるだろう。

男子の秀樹なら、普段は食べ終わっている時間帯のはずだ。

「ばーか。大事な彼女が怒られてんのに、一人で飯なんか食える訳ないだろ。早く弁当とって来いよ。ここで待ってる」

「あ、ありがとう……」

秀樹の精一杯の優しさに、菜々は心が温かくなる。

今なら少しだけ、昨日の事すら忘れられる気がした。

駆け足で教室までの道を往復して、早五分。

菜々が職員室前に戻ると、そこには二人の人影があった。

一人は言うまでもなく、菜々の愛しの彼氏である秀樹。

もう一人は……陸上部のマネージャーの少女だ。名前は確か、菱^{ひし}本^{もと}舞^{まい}花^か――。

クラスメートで、幼馴染おさなしみであるという二人は、仲睦まじげなかむつに立話をしていた。

「あ、菜々。お帰り」

そのうち、秀樹が菜々に気が付く。

舞花への視線をそらし、菜々に微笑みかけた。

「じゃ、舞花。俺、これから昼だから」

「秀樹……あんた、まだお昼食べてないの？ あっきた。今の今まで、何をしていたのやら」

舞花は大袈裟おおげさに肩を竦すくめてみせる。

その様子は、二人の仲はかなり親密だという事をうかがわせた。

「まあな。行こうぜ、菜々」

「うん」

……その時、菜々は、背後から冷たい視線を感じ、咄嗟とつぱに後ろを振り向く。

そこには、先程までの朗ほがらかな笑顔とは対照的に、感情の読み取れない無機質な表情を浮かべた舞花がいた。

秀樹と仲良さ気に歩く菜々を、じっと睨にらみつけている。

「菜々、どした？」

「あ、ゴメン。今行くね」

思わず止まってしまった菜々に、秀樹が声を掛ける。

歩きながら、もう一度後ろを振り向くと、舞花の姿は既に消えていた――。

数分後。二人は屋上の隅に腰を下ろす。

いつもは定番のお昼スポットであるここも、時間が時間なだけに人っ子一人いない。

二人の貸し切り状態だ。

「――で、菜々。どうしたんだよ……いつも真面目なお前が、青セんに怒られるなんて。本当、珍しい事もあるもんだよな」

「ん、ちよつと、考え事してて……。その時、ちよつと指されたみたい」

「あゝあるある。あの先公、人が考え事してる時とかに限って指してくるんだよな。俺もよく怒られる」

「秀樹君の場合、真面目に授業受ける気が無いのが原因じゃない？」

「はは、バレた？」

他愛ない会話を交わしながら、菜々は持参の弁当箱を開ける。

両親が共働きの彼女は、お弁当もお手製だ。

ちなみに、秀樹の昼は購買で買ったパンだ。

ペットボトルのお茶で喉を潤しながら、焼きそばパンに齧りついている。

「——でき、菜々。お前、本当どうしたの？」

「え？」

いつの間にか、和やかなムードは吹き飛んでいた。

あまりにも突然の変化に、菜々は少々面食らう。

「青センが機嫌悪いのはいつもの事だけど……。お前、昨日から様子変だよ？ 何かあったの、ばればれ。無理に、とまでは言わないけど、相談くらいならのってやるし。……それとも、俺じゃ頼りにならない？」

「そ、そんな事……！」

秀樹は、酷く傷ついた顔をしていた。

第五話

出会って数年。彼の、こんなにも悲しそうな顔を見るのは、初めてだった。

真剣な秀樹の眼差しに耐えきれず、菜々は目を伏せる。

そんな彼女を許さない、とでもいうように、秀樹は菜々の頬に手をやり、無理矢理視線を合わせた。

「目、反らすなよ。そんなにやましい事、隠してるわけ？」

「ち、違うよ！ 私、そんな事……」

「じゃ、何で話してくれないの？ 昨日からずっと上の空だし。何考えてんの、菜々？」

秀樹が心の底から心配しているのは、菜々にも伝わった。

しかし、本当に話していいのだろうか？ 本当に、迷惑にならな
いだろうか……？

菜々の心は、揺れていた。

そんな戸惑いを感じ取ったのだろうか。不意に秀樹が、ふっと微笑む。

「俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔してんの、見たくない」

「秀樹、くん……」

「だから、話して？ 辛いなら、我慢すんなよ」

その言葉が、菜々の心を溶かす。

菜々の頬に一筋の雫が流れおちると同時に、堰^{せき}を切ったように、言葉が溢^{あふ}れだした――。

全てを話し終わると同時に、菜々は、心が軽くなるのを感じた。

秀樹は黙って聞いていたが、菜々が言い終わると同時に、そつと身体^{からだ}を引き寄せる。

「菜々。こっち、向いて」

「え？」

秀樹の言葉に少し驚きながら、菜々は、涙で濡れた顔を向ける。

その瞬間、額に軽い痛みを感じる。どうやら、デコピンをくらったようだ。

「いたっ……な、何するの――」

「何でそんな大事な事、今まで黙ってたの？ 俺、そんな信用ない？」

秀樹の頬は、小さく膨ふくれている。少し、機嫌きげんが悪いようだ。

「ご、ごめん。秀樹君、陸上部の主将もやってるし、色々大変なのに、私なんかのせいで心配事増やしたくないで」

「ばーか。好きな女の子が悩んでるのに、心配しない男がいるわけないだろ？ もし、これからもこういう事があつたら、絶対相談してくれよな？」

そう言つと、秀樹は小さく微笑む。

しかし、その笑みはすぐに真面目なものへと変わった。

「……で、話を戻すけど。菜々、それ立派な犯罪きょりつはくだよな？ 脅迫罪きようぱくだっけ？ 俺、警察に言つた方が良いと思う」

「警察？ だ、だって、たかがこんな事で——」

「じゃあお前は、“たかがこんな事”にそんなに悩まされてたのか？ 脅迫状は？ ちゃんと証拠もあるなら、警察だって動いてくれるだろ」

「でも——」

「帰かえつた後、一緒に行こう？ 被害者はこっちなんだし、そんなに邪険じゃけんに扱あつかわれる事もないだろ」

秀樹は、人を安心させる笑みを浮かべる。

少し躊躇^{ためら}いがちに、菜々は頷^{うなづ}いた。

「ただいま」

菜々は小さく呟^{ささや}きながら、家の扉を開ける。

その声に、返ってくる言葉はない。

両親が共働きで、尚且つ放任主義で帰りも遅い為、菜々は実質一人暮らしも同然だった。

警察署からの帰りの為、いつもより帰宅時間は遅めだ。

秀樹の言うとおり、被害者にあたる菜々は決して邪険には扱われなかった。

鞆^{かばん}の奥底に入りっぱなしになっていた脅迫状を見せると、身辺警護の強化を約束してくれた程だ。

“また何かあったら、すぐに来て下さい”

最後に優しく伝えられた言葉が、未だ菜々の耳に残っていて、離れない。

「やっぱり、行ってよかったな。秀樹君に、明日ちゃんとお礼言わないと……」

心配してくれる秀樹や琴音達のおかげで、菜々は昨日の事にも、大分立ち直れつつあった。

と、そんな時。再び、携帯がコール音を鳴らす。

菜々はディスプレイを覗き、発信者の名前を確認する。

発信は——非通知。

「……もしもし、菜々です」

「——」

昨日と同様、相手は何も言わない。

同じ相手……ストーカー犯だ、と菜々は確信する。

先程までとは違う、落ち着いた、冷静な口調で菜々は言う。

「もしもし。……よく、聞いて。私は、あなたなんかには屈しない！
あなたがどんな姑息^{こそく}な手を使っても、絶対秀樹君とは別れないか
ら！」

ブチンッ！ 今度は、菜々が乱暴に電源ボタンを押してやる。

久々にすかつとした気分になった。

「私は、こんな奴に負けない……。絶対、負けないんだからっ！」

同じ事を口にする、段々と勇気が満ち溢れてくるのを感じる。

菜々は、名も知らぬ相手に、絶対に屈しない事を誓^{ちか}った。

だが彼女は知らない。その誓いは、数日後には跡形あとかたもなく崩れ落ちてしまつ事を。

彼女を苛さいむ悪夢は、まだ続く――。

第五話（後書き）

第三話の文章内におかしな部分があったので、一部改訂させて頂きました。

物語の内容には全く差し支えないので、読みなおされなくても大丈夫です！

m
今後とも、沢内探偵事件録を宜しくお願いいたしますm（――）

第六話

翌朝。菜々がそろそろ登校しようかと思った頃、来客を知らせるベルが鳴った。

菜々はインターホンのモニターを覗きこみ、来客を確認する。

——琴音だった。菜々が見やっていると気付くと、小さく手を振る。

「ちょっと待ってて」

一言声を掛けてから、菜々は急いでコートを羽織り、鞆かばんを手に取る。

もう少し経ってから行こうと思っていた菜々にとって、突然の来客はかなり驚きだった。

「ゴメン、待ったよね？」

「ううん。私こそ、急に来ちゃってごめん。ほら。菜々、最近色々あったじゃん。だから、朝くらい一緒に行って、話聞こうと思ったんだけど……迷惑、だったかな？」

琴音は、少し困ったように笑う。何の連絡もなしに訪れた事に、罪悪感を抱いだいているようだった。

彼女の家だって、菜々の家から決して近いわけではない。

遠回りをする、とまではいかないが、かなり余計な時間をくった筈だ。

そんな心遣い^{こころづかい}さえも、今の菜々には有り難^{ありがた}かった。

「ううん。……私なんかのために、ゴメンね？　気遣ってくれて、ありがと」

「気遣ってなんかないって。私、菜々の傷つく顔が見たくないだけ」
「ありがとう」

“俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔してんの、見たくない”

琴音の言葉に、不意に既視感^{きし}を覚える。昨日の事を思い出し、菜々は思わず、ふわりと微笑んだ。

「どうしたのよ。菜々、今日は随分^{ずいぶん}元気じゃない」

「ふふ、……実はね——」

少し照れくさかったが、菜々は、昨日あった出来事を琴音に話す事にする。

微笑みながらのろけ始める菜々の話を、琴音は、曖昧^{あいまい}に微笑みながら聞いていた——。

話し始めて、どれくらいの時間が経っただろうか。

気がつくと二人は、学校に到着していた。

今まで、黙って菜々の話に耳を傾けていた琴音も、流石に苦笑しながら口を挟む。^{はさ}

「菜々ったら、本当松浦君に首ったけね。あんたみたいな彼女持て……松浦君、本当幸せ者なんだから」

「そ、そんな事ないよ……!!」

菜々は照れ隠しに首を振る。頬^{ほお}が真っ赤なのは、寒さのせいだけではないだろう。

そんな他愛ない会話すらも、本当に楽しかった――。

彼女達の会話が聞こえてきたのは、本当に偶然だった。

休み時間。菜々が用を足し終え、個室から出ようとした時――一人の少女の声が聞こえたのだ。

「ねえ麻美^{まみ}、松浦君に彼女出来たって噂、本当なの？」

「らしいよ。しかも、相手は舞花じゃないんだって……。あたし、

本人から聞いたもん」

「マジで！？ 舞花と松浦君って、付き合ってたんじゃないの？」

どうやら三人グループのようだった。

声に聞き覚えが無い事から、恐らく他のクラスの女子なのだろう。

生徒数が多いこの学校なら、決してあり得ない事ではなかった。

そして——噂の中心は、菱本舞花。出ていける状況ではなく、菜々はその場に立ち尽くした。

聞きたくない！ という菜々の心情とは裏腹に、少女達の雑談は続いていく——。

「だって舞花って、松浦君追っかけてこの高校入ったんでしょ？ぶっちゃけ、元々そんなに頭が良いわけでもなかったらしいよ」

「陸上部マネだって、松浦君目当てで入ったらしいしね」

「それが本当だったら、舞花めっちゃ可哀想じゃん！」

「小学校からの幼馴染だっけ？ 健気だよね」

少女達の一言が、菜々の心に深く突き刺さる。

……そして、それと共に湧きあがる疑念。

ストーカー犯人って、もしかして――。

よく知らない人に対する勝手なイメージに、菜々は嫌悪感けんおを覚える。

……しかし、有り得ない話ではないのだ。

陸上部で朝練がある彼女なら、早朝のうちに脅迫状きょうはくを忍び込ませておく事くらい、可能かもしれない。

非通知で電話する事だって、別に難しい話ではない。

電話番号をどうやって知ったのかは問題だが、そんな物は、友人達にそれとなく聞けば済む話だ。

秀樹君に、相談しなきゃ……。

少女達が立ち去った後も、菜々の頭の中は、菱本舞花の事でいっぱいだった――。

昼休み。菜々は、休み時間思った事を打ち明ける為、秀樹の教室へと向かった。

これまでも、彼と共に昼食をとった事は何度かあったが、内気な菜々から誘うのは初めてだった。

少し緊張きんちやうする。

やがて教室に辿りつくと、菜々は恐る恐る辺りを見回す。

見慣れない顔ぶれの中に、彼は——いた。仲が良いのであろう男
友達と談笑している。

舞花と話していない事に、菜々は少しだけほっとする。

人ごみの中に、彼女の姿は見えない。

恐らく、他の友人達とお昼を食べに向かっているのだろう。

菜々は、扉近くで談笑している男子グループに向かって声を掛け
る。

「あ、あの——松浦君、呼んで貰えませんか？」

「あんた、秀樹の彼女？ 秀樹——！ お前の愛する彼女が来てるぞ
」

グループの中心格らしき少年が、クラス中に呼びかける。

その瞬間、教室中にくすくす笑いが広がった。

菜々の頬は真っ赤になるが、とうの本人である秀樹は、いつもの
笑顔で受け答えしている。

そして、菜々の元へと訪れると、いつもと変わらない明るい声で
問いかけた。

「菜々、急にどした？ お前から誘いに来るなんて、珍しいな」

「あ、あの……。突然、ゴメンね。い、一緒にお昼でもどうかな？
……って思ってた」

表情や声音こゑから、菜々の言わんとする事を、秀樹は瞬時しゅんじに察した
ようだ。

いつも浮かべている笑みが一瞬にして消え、真面目な顔へと変わる。

「……分かった。ちょっと待ってて、昼飯取ってくる」

秀樹は踵かかとを返すと、元居た席へと戻っていく。

菜々は小さく、深呼吸をする。心なしか、少し緊張が薄れた気がした。

第六話（後書き）

改訂前 琴美 ？ 改訂後 琴音 ○

内容自体に変更はありません（汗）

第七話（前書き）

しばらく更新できず、申し訳ありませんでしたm（――）m

お暇なときにも、お読みいただけると嬉しいです！

第七話

二人がやってきたのは、人目のつかない校舎裏だった。

薄暗く、じめじめとしたここは、人っ子一人いない。

皆、食事をとるなら、もっと明るい食堂や、屋上、中庭などに向かうからであらう。

「ここでもいい？ …… あんま、話聞かれたくないんだろ？」

「うん。気遣ってくれて、ありがとう」

「いや。気にしてない」

彼の瞳は、いつもより真剣だった。

普段は明るい人がこの表情を浮かべると、なかなか怖いものだ、と菜々は思った。

「で、どうしたんだ？ 昨日の事で、また何かあった？」

秀樹の問いに、少し口籠くちしもる。

彼の幼馴染でもある、という舞花の名を出すのは、少し怖かった。

今更、後にはひけない——そう思いなおし、菜々は口を開く。

「——私、犯人、分かったかもしれない……」

「本当かよ！？ い、一体誰が？」

「菱本さん、じゃないかなって思ってる」

「菱本……つて、舞花が！？」

予想以上に驚かれ、菜々はびくりと肩を震わせる。

いつもの彼ならそこで謝るのだろうが、菜々の告白はかなり衝撃的だったらしい。

かなり表情が強張っている。

「——ありえない。まさか、あいつが……」

しばしの沈黙の後、彼が呟いた言葉は“ありえない”だった。

その後も、まるで狂った機械のように、ありえない……と連呼する。

しかし、菜々は確信していた。彼女が犯人である、と――。

確たる証拠が無くても、あの時感じた視線が、菜々に真実を告げていた。

「菜々。お前、多分勘違いしてると思う」

「え？」

気が付くと、彼は同じ言葉を繰り返すのをやめていた。

ただ、悲しげな瞳で菜々を見つめている。

「俺、あいつの幼馴染だから、よく知ってるんだ。……あいつ、舞花さ、そういう曲がった事が嫌いなんだよ。弱い者苛めとか、嫌がらせとか。昔からそういう事があると、真っ先に止めさせてんだ。悪いけど、俺には、舞花が犯人だとは思えない」

「……そう、なんだ」

その言葉に、菜々は、ズキン——と胸の奥が痛むのを感じる。

秀樹の口調からは、彼女を大切に思っている、という事がよく伝わってきて……。

不意に菜々は、休み時間の少女達の会話を思い出す。

“マジで！？ 舞花と松浦君って、付き合ってたんじゃないの？”

周りから見れば、菜々と秀樹なんかより、舞花と秀樹の方がお似合いに見えるのだろう。

小学校からの幼馴染——という言葉が、急に菜々の頭の中を駆け巡る。

「……やっぱり、秀樹君には、菱本さんの方がお似合いなのかな？」

「菜々、何言ってるの？」

「ごめんね、折角呼びだしたのに、嫌な気持ちにさせちゃって」

「いや。別に、そういうわけじゃ……」

そこで、ようやく秀樹はハツとした表情を浮かべる。

菜々に嫌な思いをさせてしまった、というのが、直感で分かったようだ。

「悪い。お前の気持ち考えないで、自分の事ばかり喋っちゃって」

「ううん。私こそ、ゴメン」

口でこそそう言うが、菜々の口調は沈んでいた。

秀樹にもそれが分かるらしい。困ったように眉根を寄せている。

「ご、ごちそうさま。変な事言っちゃって、ゴメンね？」

「え。でも菜々、全然食べてな——」

「ごめんなさい！」

菜々は、まだ半分以上残っている弁当を手早く包み、立ち上がる。

そして、駆け足でその場から立ち去った——。

秀樹君が悪いわけじゃない。……分かってる、そんな事。

これは、ただの我儘で、逃げ出しちゃいけなかった、って、分か
つてる。わがまま

分かっていたのに——どうしても、その場にはいられなかった。

どれくらいの時間が経過したのだろう。

気が付くと、菜々は校舎裏のトイレにいた。

あまり人の訪れないここには、菜々以外誰もいない。

そこで菜々は——声を押し殺して、泣いていた。

人がいないのだから、嗚咽をこらえる必要は全くないのだが、無
意識にもし誰か来たら——という恐怖が脳内を支配しているのか、
大声で泣く事は出来なかった。

「菜々！」

その時、菜々の耳に聞き慣れた声が飛び込む。

普通なら、わざわざ暗い旧校舎まで足を運ぶ筈がない。

菜々を探しに来た——と頭で理解する前に、菜々は、彼女が今、

もつとも会いたくて、会いたくない者の名を呟いた。

「……秀樹、君？」

「残念でした。悪かったわね、松浦君じゃなくなつて」

「その声……こと、ちゃん？」

そこには、呆れたような苦笑を浮かべる、親友の姿があつた。

琴音は小さく肩を竦め、ポケットからハンカチを取り出し、そつと手渡す。

「なんて顔してんのよ。折角の可愛い顔が、台無しじゃない」

「……んで、ここに？」

「松浦君に言われたのよ。“菜々と喧嘩した。謝りたいから、探すのを手伝ってほしい”ってね。もう、大変だったんだから……。多分松浦君、今も走り回って、あんたの事探してる」

琴音の口調は、厳しかった。

暗に、早く秀樹の元へ戻れ——と言わんとしているのが、菜々にも伝わってくる。

「……今、会いたくない」

「あんた、何言ってるの？ 何があつたわけ？ 朝は、あんなに元気だつたくせに」

「……つく——」

「な、菜々？」

嗚咽混じりに、菜々は事の顛末^{てんまつ}を話し始めた——。

第八話

「成程、ね。菱本さんが怪しい、って訴えたら受け入れて貰えないで、その麻美って子の悪口を不意に思いだした——ねえ」

「皆、私と秀樹君なんか似あわない、って思ってるに決まってるんだよ。ことちゃんだってどうせ、心のどこかで、そう思ってるんじゃない？」

「馬鹿^{ばか}ね。そんな事、思ってるわけないでしょ。心配しなくても、二人は充分お似合いだと思っわよ」

「——嘘、つき」

菜々は先程と比べると少し落ち着いてきたものの、未だ情緒不安^{モウチウアン}定だ。

瞳を潤ませ、ぐすつ、と鼻を鳴らしている。

「……じゃ、別れれば？ そんなに松浦君の事が信頼できないなら、別れた方が良いと思う」

「それは嫌！ だって、私——」

「考えてもみなよ！ 今回こんな事態を招いたのも、元はといえば、二人が付き合いだしたのが元凶でしょ？ だったら、今まで通りの友達同士に戻れば、万事解決^{ばんじ}じゃないの？」

「……それは、そうだけど」

確かに、琴音の言う事も一理ある。

それでは犯人の思惑通りではあるが、ここまで精神的に追い詰められているのなら、まだそっちの方がマシ、なのかも知れない。

琴音が、嫌がらせの為だけで“別れた方がいいかもしれない”と言ったわけではない。

菜々の事をきちんと思った上で言っているというのは、彼女にも分かっていた。

……それでも、簡単に納得がいくものではない――。

と、そんな時。

キンコンカンコン――と、昼休みの終わりを告げるチャイムが、二人の耳に飛び込んだ。

「昼休み、終わっちゃったね。急いで戻らないと、授業に遅刻しちゃうよ。菜々、行こ？」

「……うん」

頭の使いすぎなのだろうか。酷く気分が悪い。

意識の霞んだ頭を振り、菜々は教室への歩を進めた。

気分の不調は、教室へ戻ってもなかなか治らなかった。

それどころか、寧ろ悪化^{むし}すらしている。

妙に肌寒いのは、気温だけのせいではないだろう。

黒板を見るのも気だるく、菜々は窓の外を、ただぼーっと見やっていた。

「——速水？」

「え、あ——はい」

ふと教師に名を呼ばれ、菜々は慌てて前を向く。

話を聞いていなかった事を咎められるかと思い、身を竦^{すく}めたが、教師は心配そうな顔を向けていた。

「お前、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫です」

そう言ってみるが、教師の表情は晴れない。

教師は一つ溜息を吐き、前の方に座る少女に呼びかける。

「石田、お前確か保健委員だったよな？ 悪いけど、速水の事、保健室まで運んでってくれないか？」

「分かりました」

石田、と呼ばれた少女は、ゆっくりと立ち上がると、菜々の席へとやってくる。

そして、彼女の耳元で小さく囁いた。

「大丈夫？ 顔、真っ青じゃん。行こっか」

「——ありがと、石田さん」

あまり親しくない少女だったが、快く菜々に接してくれた。

菜々が弱々しく微笑むと、そつと笑いかえしてくれた。

その優しさに心を温めながら、菜々は立ち上がる。

クラス中の視線が降り注が（そそ）れていたようだが、あまり気にならなかった——。

「38度、5分……ね。随分高熱じゃない。石田さん、悪いんだけど、担任の先生に早退する旨、伝えてもらえないかしら？ できれば、荷物の用意もしてくれると嬉しいわ」

「分かりました。……速水さん、お大事にね」

最後に小さく手を振った後、保健室から石田が出て行き、室内には、校医の先生と菜々の二人だけが残った。

菜々は、無理矢理校医にベッドに寝かしつけられる。

ベッドに横たわると、少しだけ気分が楽になった気がした。

「速水さん、お家に」両親はいらっしゃる？」

「いえ……うち、共働きなので」

「そう、分かったわ。先生が家まで送っていつてあげる。……っと、その前に、病院行かなくちゃね」

「あ、いえ——そこまでしてもらうなんて、悪いです」

「良いから良いから……あ、起きなくていいから。石田さんが来るまで、寝てなさい」

「ありがとうございます——」

必要最低限の事を話し終えると、気を遣っているのか、それ以上は何も言わなくなる。

わざわざこちらから話しかける事もなく、菜々は気だるい身体に意識を委ねた——。

過労からくる、ストレス性のもの——と、医師には、そう診断された。

要は、最近起こっている事実には、体が付いていかなかった、と

いう事だ。

気の弱い菜々には、よくあることだった。

心配そうな顔の校医の好意に甘え、結局菜々は家まで送ってもらった。

一階のリビングにあるソファーに身を委ね、熱で朦朧とする意識の中、菜々は今まであった事を思い返す。

（はじまりは、あの脅迫状だったのよね）

全てが狂い始めたのは、あの日の手紙から。

それから、数は決して多くないものの、繊細な菜々の心を傷つける出来事が何度もあった。

（考えてみれば、あの後ストーカー犯から受けた被害って、無言電話が二件だけなのよね。こんな事で一々傷ついて、皆に迷惑ばかりかけちゃうし……）

はあ——と、菜々は深い溜息を吐く。

こうして難しく考えてしまうのは悪い癖だ、と自分で分かっているのだが、中々直せるものではない。

（……ああ、もう、嫌になっちゃうよ）

そんな菜々の思考の悪循環を止めたのは、今話題の、人気歌手の曲だった。

音の発生源に、菜々はすぐに思い当たる。

……ケータイだ。確か最近、メールの着信音をこの音に変えた記憶がある。

（誰だろ……琴音、かな？）

昼休みの事もあり、正直あまり会いたくなかったが、気づいていくせに返信をしないのは、失礼にあたる。

ぼんやりとする意識の中、菜々はほぼ無意識にケータイを開く。

それが、先程までちょうど考えていた、ストーカー犯からのものだった——という発想など、思いつきもせず——。

『新着メールが一件届いています』という無機質な文字が、ディスプレイに浮かんでいる。

発信者は——知らないメールアドレスだった。

『お前と松浦秀樹は釣り合わない。早く別れろ』

たった、それだけの短い文面。

確かに嬉しくはないが、そこまで酷い内容ではないだろう。

しかし、……時期が悪かった。

昨日の菜々なら、そのメールを無視するか、“ふざけるな”メールを送り、自分の持つているアドレスを駆使し、片っぱしからそのアドレスの持ち主探しに勤しんでいたのだろうが、今日の菜々は、いつもより更に心が脆かったのだ。

琴音——そして、秀樹の顔が、頭をよぎる。

親しげに舞花と話す、愛しい、大好きな彼氏の姿……。

（私……もう、二人の顔、見たくないよ）

酷い頭痛とともに襲う、激しい胸の苦しみ。

胸の奥のわだかまりに耐えきれず、菜々は泣いた。

頭に浮かび続けるのは、楽しげに微笑み合う、秀樹と舞花。

菜々には入っていけない空間だった。

（私、こんな気持ちのまま、秀樹君に会えないよ）

秀樹と顔を合わせるのが無性に怖かった……。

その日から菜々は、学校に行っていない——。

第八話（後書き）

はい。ようやく過去編（？）が終わりました。

この後は現在に戻り、あの探偵さんが活躍してくれるはずです！
……多分。

こんなグダグダ駄文ですが（汗） お暇なときにも、読んでいただけると嬉しいです♪

第九話

……随分と、長い話だった。
ずいぶん

否、話の内容だけが長かった訳ではない。

話の途中で菜々が嗚咽を漏らし始め、一旦会話が中断される、という事が、多々あったのだ。

最初の時のように、意味も無く口籠る事は少なかったもので、苛立ちまではしなかったが、基本的には気の長い啓輔でさえも、実を言くと、少し苦痛に感じる時があったほどだ。

勿論、そんなものは表情にはおくびにも出さなかったのだが。

啓輔は、事務所の壁にかけてある時計を見やる。

現時刻は、午後七時半——彼女が来てから既に数時間経過していた。

窓を見やると、いつの間にか、外は真っ暗だ。

ただでさえ暗くなるのが早い冬。女子高生が一人で帰るには、少し危険な時間帯だ。

啓輔は、腰かけていた長椅子から立ち上がり、玄関近くのフックに掛けているコートを手に取った。

「——送みましょう。家は、どの辺ですか？」

「あ、いえ、大丈夫です！　どうか、お気になさらずに」

突如、菜々は慌てふためく。

彼女は、話を聞いていて感じた、気の弱い少女、という印象通りのようだった。

啓輔は、いつも以上に真剣な瞳を菜々へ向ける。

「速水さん。貴女、ご自分の立場、分かっているじゃないですか？　幸いにもまだ、体に影響は無いですが、いつそのストーカー犯に何をされるか、分かりません。只でさえ変質者も多いのですから。」

……大丈夫です。何も、取って食いやしませんよ」

「でも、私、本当に——」

「……分かりました。ではせめて、タクシーに送らせましょう。少し高くつきますが、ストーカー犯や、変質者に追われるよりはマシでしょう？」

「は、はい。そうします」

タクシー、という手段で、ようやく菜々は納得したようだ。

ぺこりと頭を下げ、事務所の出入り口の扉を開ける。

せめて近場の大通りまでは送って行こう——と、啓輔もその後に続いていった。

啓輔が事務所に戻ると、長椅子に腰かけ、不機嫌そうに頬を膨らます少女が目映った。

優だ。会話が長く退屈だったのと、無断で外出された事に対して、腹を立てているようだった。

……後者はともかく、前者の場合は、彼女にも責任があるような気はするが。

優は、表情に合った不機嫌そうな声を出す。

「随分遅かったね。菜々さんの話が長かったのは知ってるけど、まさか最後に口説きにかかるとは思わなかったよ」

「……は？」

「だって、いい年したおじさんが、か弱い女子高生を二人きりで車に誘った上、“何も、取って食いやしませんよ”なんて気持ち悪い台詞言うなんて、明らかにナンパ——った！ い、痛い！ 止めて」

「どこをどう捉えたらそういう解釈になるんだ！ この馬鹿！」

啓輔は、両手で拳骨げんこつを作り、優のこめかみにぐりぐりと押し当てる。

俗に言う梅干という奴だ。かなり痛いらしく、優の瞳には薄らと涙が滲んでいる。

啓輔はしばらくそれが続けていたが、優の口から“ごめんなさい”という言葉が出てくると、ようやくその手を止めた。

優は小さく頭をさすりながら、きつ、と啓輔を睨みつける。

「……パパ、ちょっとは加減してよね。これ児童虐待だよ？^{ぎゃくたい} 訴え^{うった}られちゃうよ？」

「この程度で訴えられるなら、全国の親達は今頃全員刑務所だろ」

啓輔は呆れた顔で娘を^{たしな}窘める。

優は未だ膨れていたが、ふと思いなおしたように、啓輔に問いかける。

「で、パパ。明日からどうするの？ 大方、犯人の目星は付いてるんでしょ？」

「お前……さては、聞いてたな。まあ、大体はな」

その言葉に、優はすつと目を細める。彼女曰く、思考が推理モードに切り替わった、という事らしい。

尤も、どうせ何か言う時は、ワトソン博士もびっくりの迷推理なので、啓輔が真面目に聞いた試しは無いのだが。

「で、これからどうするの？ まさか、今から高校まで直行……なんて、言いださないよね？」

「今何時だと思ってるんだ。これから急いで行っただとしても、着くのは八時半頃——とづくに皆、帰ってるだろ」

菜々曰く、陸上部の活動が終わるのは、いつも大体六時頃だそう
だ。

事務所から彼女達の通う学校までは、多く見積もって約一時間。

とすると、帰りは大体七時半過ぎ……関係者からの話が長引いたり、渋滞などがあつたら、もっと遅くなるだろう。

啓輔は、帰りが適度に遅くなる時間の場合は、夕飯や防犯などの関係上、出来るだけ優を同行させる事に決めていた。

まあ、ただ単においてけぼりにされて拗^すねる娘をあやすのが面倒——という理由もあるのだが。

「優。明日は、帰るの少し遅くなりそうなんだけど——」

「勿論一緒に行くよ!」

「……俺、まだ全部言い終わってないんだけど」

「助手兼次期沢内探偵なんだから、事件に同行する権利くらいあるでしょ?」

「次期沢内探偵、ねえ」

偉そうに腰に手を当てる少女は、とても探偵には見えない。

優も、あと数十年もすれば、立派な探偵になっているのか——と、啓輔は思い耽^{ふけ}るが、すぐに首を振る。

「無理だ。俺には想像できない」

「パパ、今何かすごく失礼な事考えてなかった？」

「……さて、夕飯の支度でもするか」

「あ、ちょっと！ 話を変えないでよ！」

啓輔はさっと目を逸^そらし、座っていた応接用のソファから腰を上げた。

冷たい優の視線を受けながし、啓輔は、キッチンのある奥の部屋へと向かって行く。

——さて、今日のメニューは何にしようか。

こうして、夜は更^ふけていく——。

第十話

翌日、午後四時半過ぎ。優が帰ってくると、啓輔は、菜々の通う青港高校へと車を走らせた。

啓輔はハンドルを操作しながら、これから行っ事を整理する。

まずは、関係者——松浦秀樹と、塚本琴音、そして菱本舞花に対する聞き込みだ。

いきなり車内に誘い込むのも何なので、近くの小洒落た喫茶店にでも入って事情を聞くのが良いだろう。

……塚本琴美と松浦秀樹の二人はともかく、菜々と敵対関係にある菱本舞花が真面目に話を聞いてくれるかどうかは微妙だが。

そんな父親の心情を察したのか、助手席に座る優が、啓輔にこつと微笑みかける。

「大丈夫だよ。いざという時は、この優様に任せなさい！ この得意な話術で——」

「あーはいはい。そりゃどーも」

「もう！ ちゃんと聞いてよね！」

「はいはい」

啓輔は小さく頬を膨らませる優の頭を、左手でばんぽんと撫でる。

子供扱いするな。やら、片手運転は危ない、なんて声が聞こえてきたが、華麗にスルーする。

その内、啓輔に真面目に取り合う気が無い事を察し、優は何も言わなくなる。

小さく苦笑を浮かべ、啓輔はようやく左手を離した。

「あ……ねえ、パパ。あれじゃない？ 菜々さんの通う学校」

「ん？ ……ああ。そうみたいだな」

優が遠くに見える、大きな白い建物を指差す。

カーナビを確認すると、確かにそこには、“都立青港高等学校”と刻まれている。

どうやら、目的地は近いようだ。

啓輔は、カーナビを見つめたまま、近くに車が停められそうな場所が無いか——と思索する。

流石に、校内に停めるのはまずいだろう。

高校付近にコンビニの表示を見つけたので、そこに駐車する事にする。

距離から推定して、高校から歩いて五分——まあ、丁度良い距離だろう。

まもなく、啓輔はコンビニを見つけた。

青港高校までの道中、買ったばかりの菓子パンを頬張りながら、優が問いかける。

「ねえ、パパ。いざ高校へ行くのは良いんだけどさ。……いきなり関係者でもないおじさんが潜入して、大丈夫なの？ 大ごとになって、教師とか呼ばれたら面倒だよ」

「おじ……まあ、確かにな」

「どうするの？ まさかとは思うけど、無計画とか？」

「――」

啓輔の沈黙を、是と受け取ったようだ。

優が困ったように眉根を寄せる。

「ただでさえ子供連れのおじさんなんて怪しさ満載なのに、その上“ねえ君、よかったら僕の車に來ない？”……なんて、犯罪者だよ？ もしそんなおじさんがいたら、優だったら警察呼ぶよ。いやマジで」

「流石に、そんな誘い方をする気はないんだが。まあ、ある程度は考えてあるから安心しろ」

「……ふーん」

「あ、あれっばいぞ。青港高校」

冷たい娘の視線をかわし、啓輔は白い校舎を指差す。

車で遠目から見たものより、少し古く見える。

啓輔の記憶が正しければ、確か彼の学生時代には既に名門と言われている筈だ。

単純計算で、創立十年以上。

学校としては比較的新しい方なのだろうが、校舎が古くなっているのにも^{つなず}頷ける。

腕時計を確認すると、五時四十分を指している。

辺りは既に暗くなりかけているが、校舎から漏れる光のお陰で、足元は明るい。

二人は、校門の前で生徒達が出てくるのを待つ事にする。

しばらくそうしていると、やがて、校舎から一人の女子生徒が現れた――。

「ねえ、君。ちょっと時間良いかな？」

「……はあ。貴方、一体——」

少女は、啓輔に訝^{いぶか}しげな瞳を向ける。かなり怪しまれているようだ。

勿論それは当然の反応なのだろうが……少し傷つく。

「二年の、松浦秀樹って知ってる？ 俺の弟なんだけどさ。今日、急用ができたから、迎えに来たんだ。まだ、校内にいる？」

「秀樹に、お兄さんなんていない筈^{はず}ですけど」

「長い間海外にいてね。久しぶりに戻って来たんだ。知らないのも無理はないよ」

“秀樹”という呼び名から察するに、どうやら彼とは顔見知りのようだ。

家族構成も知っているようなので、ある程度親しい仲なのかもしれない。

まだ怪しんではいるようだが、その説明で一応納得したらしい。

少女は校舎を指差した。

「秀樹なら、もうすぐ来ると思いますよ。部活も終わつたし、今は着替え中だと思います……あ、ほら」

その時、校舎から少年達の集団が見える。

重そうな鞆^{かばん}を背負い、和気あいあいと話しているのが見て取れた。

「秀樹。あんたにお客さんが来てるわよ。お兄さん、だって」

「お兄さん？ 俺、一人っ子なんだけど——」

少女が集団に声を掛けると、リーダーらしき一人の少年が振り向く。

成程。確かに、菜々の話通り、なかなか整った顔つきをしていた。

しかし、彼女のいう爽やかな笑顔は浮かべておらず、疲れたように弱々しく微笑んでいた。

心なしか、少しやつれている。

やはり、菜々が来ていない事に影響されているのだ——と、啓輔は思った。

「こんにちは。……えっと、秀樹ですけど」

「ああ、突然ごめんね。速水菜々さんについて、話があるんだけど。時間、良いかな？」

後半部は、周りに聞こえないように、少し声を顰める。

思った通り、“速水菜々”という単語に、秀樹はピクリと反応した。

「……ちょっと、待ってて下さい」

先程とは違う、恐ろしい程冷静な声音で、秀樹は啓輔に囁き返す。

一緒に校門を出てきた少年達に適当に言い訳をした後、彼は戻ってくる。

「お待たせしました。話って、一体？」

「ここじゃあ何だから。近くファミレスにでも」

「……分かりました」

秀樹は、しっかりと頷いた。

第十一話

三人が向かったのは、某ファミリーレストランのチェーン店だった。

時間が時間だけに、客は少ない。

ちらほらと学生達の姿も見受けられたが、幸いな事に、秀樹の友人らしき人物はいないようだ。

啓輔は出来るだけ奥の方の席を選び、腰かける。

着席とほぼ同時にやってきた店員に軽食とソフトドリンクを三つ頼み終わると、啓輔は口を開いた。

「まずは、自己紹介から始めましょうか。私、沢内探偵事務所所長、沢内啓輔と申します。本日は、依頼人である、速水菜々さんの件について、幾つかお尋ねしたい事がありますので、このような場を設けさせて頂きました。隣に座っているのが、娘の優です。秘密は厳守致しますが、席を外させたい時は言つて下さい」

「ご丁寧^{ていねい}に、どうも……。俺、菜々の彼氏の、松浦秀樹です」

啓輔の正体は、思いもよらないものだったらしい。秀樹は呆然とした面持ちで彼を見つめている。

緊張^{きんぱう}をほぐすため、啓輔は小さく微笑を浮かべた。

「そんなに、固くならなくても結構ですよ。ただ、私の質問に幾つ

か答えて下されば、結構です。勿論、答えにくい質問には、無理に答えて下さらなくても構いません」

「分かりました。俺なんかの証言で、菜々が少しでも救われるなら……」

「ご協力、感謝します」

「あ。でも、その前に一つ、俺から質問しても良いですか？ どうしても、確認したい事があるんです」

「何でしょう？」

「——ここ一週間の間に、菜々と会われたんですよね？ あいつ……元気にしてましたか？」

啓輔の意と反し、それは素朴そぼくな疑問だった。

しかし、秀樹の浮かべる表情はどこか切実だ。

こんな胡散臭い者の言葉でも、そこに彼女が戻ってくる可能性があるのなら、迷わず信じる、という事だろう。

菜々は、間違いなく想われていた。

「どうでしたか？ 俺、何度かあいつの家行ってみたんですけど、居留守使われて。あいつと最後に会ったのは、もう一週間くらい前なんです」

「——勿論、元気でしたよ」

その瞬間啓輔は、隣で優がはっと息を呑んだのを感じた。

事務所に来た時の菜々は、情緒不安定で、お世辞にも元気と言える状態では無かった。

しかし、真実とは時に残酷な物となる。それを知る彼は、^あ敢えて嘘をついた。

啓輔の答えに、秀樹がはっと息をつくのが分かった。

心なしか、先程よりも落ち着いている。

「有難うございました。俺に答えられる範囲の事なら、何でも聞いて下さい」

「……では、質問に移させて頂きます」

啓輔は、この少年に聞いておきたい事が二つほどあった。

「まず、一つ目に。……松浦さん。貴方は、菱本舞花さんに疑いをかけた菜々さんと口論になり、喧嘩をしたんですよね？」

秀樹がはっと顔を強張らせたのが分かった。

幾ら何でも、いきなりすぎただろうか……？ と少し反省する。

しかし、彼は少し間を置いた後、小さく頷いた。

「今思えば、あいつ——菜々には、酷い事をしたな、って思ってま

す。……自惚れかもしれないけど、信頼を寄せてくれていた菜々からしてみれば、結構辛かったと思います。それに気付いて、慌てて謝ろうと思って、あいつの姿探したんですけど——何処にも、いなくて……」

それっきり、彼は口をつぐむ。その当時、菜々がいたのは旧校舎の女子トイレだ。

男子の彼が探しあてられなかったのも、無理はない。

「貴方は、幼馴染の無実を訴えた。ただ、それだけの事をしたまでです。貴方に責任はありません」

「……ありがとうございます。そう言って貰えると、少し気分が晴れます」

秀樹は、弱々しく微笑んだ。

やはり、“気にするな”と言われても、そう簡単に受け入れられるものではないらしい。

これは当人達の問題であり、部外者が口出しする事ではない。

啓輔はそれ以上その事には触れず、話を進めた。

「では松浦さん——貴方は、何故そこまで、彼女を信じているのですか？」

「彼女、って、舞花の事ですよ？ 俺、あいつの幼馴染なんですよ。あいつの事は、小学校の時から知ってるんです」

「ええ。その辺りは、速水さんから伺っています」

「そうですか。……いや、実はこの話には続きがあつて——恥ずかしながら、俺、小学生低学年の頃、一時期苛められてたんですよ」

「……ほお」

その情報は初耳だった。照れくさそうに頭を掻きながら、秀樹は話を続ける。

「俺、昔は結構弱つちくて、その事をからかわれて、ちよつかい出されてたんですよ。そんな俺を助けてくれたのが、舞花でした——」

「止めなさいよ、あんた達！ そんな事してて、恥ずかしくないわけ！？」

“秀樹君も秀樹君よ！ 男の子でしょ？ なんて言い返さないの！？”

「——後で知ったんですけど、あいつんち、一人兄貴がいるらしくて。結構やんちゃに育ってきたらしいんです。あんまり仲良くなかった俺の事も、何の見返りも持たずに、助けてくれて……だから、

そんなあいつが、ストーカーなんて卑怯ひきょうな真似……絶対にするわけ
ないんです」

そう告げる彼の瞳は真剣そのもので……とても、嘘をついている
ようには見えなかった。

第十二話

確かに、秀樹の話を聞く限り、菱本舞花が犯人だ——と安直に決めるのは、早すぎる気がする。

……まあ、かといって、彼の話をまるつきり鵜呑みにし、彼女を容疑者候補から外す気はさらさらないのだが。

啓輔は二つ目の質問を、秀樹に問う。

「それでは最後にもう一つ——まあこれは、純粹な好奇心が強いのですがね。お二人は、どこで知り合われたんですか？ 速水さんの話を聞く限り、お二人のクラスは違うらしいですし……失礼ですが、普段の速水さんと松浦さんに、接点があるとは思にくい」

結構酷い事を言った気もしたが、秀樹は気にした様子もなく、照れくさそうに微笑んでいた。

「ああ。……これ、ちょっと惚気話になっちゃうんですけど、良いですか？」

「どうぞ」

「菜々とは、一年の頃、クラスが同じになったんです。出席番号の関係で、席替えする前の最初の一ヶ月は隣同士で……」

そこで一旦言葉を区切り、秀樹は、どこか遠くを見る様な目をした。

口元には薄らと微笑が滲^{にじ}んでいる。

その頃に一目惚^ほれしたんだな——と、啓輔には何となく思った。

「——ああ、すみません。つい、当時の事を思い出しちゃって。それで、二年、三年とクラスは離れちゃったんですけど、今年の文化祭の実行委員会で、一緒になったんです」

「成程。それで、昔の想いが蘇^{よみが}ってきた、と。……随分、素敵なお話ですね」

「す、すみません！　こんなくだらない事長々と話しちゃって……」

啓輔がにこやかに微笑^{ほほえ}んだ瞬間、はっとしたように、秀樹が真っ赤になる。

菜々の聞いていたイメージとの違いに少し戸惑ったが、なかなか面白い少年だ——と啓輔は思った。

「いえ、聞いたのはこちらですし。こちらこそ、お時間を取らせてしまい、すみませんでした」

「い、いえ、そんな——」

秀樹は照れ隠しに、頼んだアイスコーヒーに口を付けた。

しばらく二人は世間話を交わしていたが、六時半を過ぎた頃、啓輔はわざとらしく時計を見やる。

そして、秀樹に小さく会釈えしゃくをしながら、申し訳なさそうに告げた。

「こんな時間まですみませんでした。そろそろ、失礼します」

「あ、じゃあ俺も……」

啓輔が立ち上がると同時に、秀樹も立ち上がった。

「え？ パパ、もう行くの？」

届いたばかりのサンドイッチを頬張る優が不満げな声を上げたが、啓輔は無視する。

優は名残惜しげに皿を見つめていたが、二人に置いて行かれるのは嫌なので、渋々立ち上がった。

「お会計、1152円になります」

「えっと、アイスコーヒー一杯だから——」

レジの前で財布を取り出す秀樹を、啓輔がにこやかな微笑みで制止した。

「ああ、結構です。今日は、私の奢おごりですよ」

「そんな……悪いです」

「話を聞かせて下さったお礼です。気にされなくて結構ですよ」

「本当に大丈夫ですから。俺、お金の事で問題作るの嫌いなんです」
困ったように微笑みを浮かべ、秀樹は自分の分を店員へ支払う。

幾ら高校生とはいえ、所詮は学生。

手に職を持つ啓輔と比べ、手持ちがそんなに多いわけではないだろう。

最近の若者にしては、随分しっかりしているな——と啓輔は思った。

……いや、彼自身も充分若者の部類に入るのだが。

結局、秀樹が啓輔に奢られる事は無かった。

二人が秀樹と別れ、車に戻っても、優の機嫌が悪くなる事は無かった。

食事の邪魔をされたのだから、てっきりまたあの不機嫌そうな顔で膨れ出すかと思っていたので、啓輔には少し意外だった。

「優、怒ってないのか？ サンドイッチ、まだ全部食べてなかったのに」

「え？ ……ああ、別に」

シートベルトをしながら、優は淀みなく答える。

確かに、声音からも怒りは伝わってこない。

一体どういう心境の変化だ？——と、啓輔は、訝しげに眉根を寄せた。

「どうしてまた急に？ てつきりお前の事だから、“パパの馬鹿！ サンドイッチの神様に呪われちゃうよ！”なんて言い出しかねないと思って、結構覚悟してたのに」

「……パパ、一体私の事、何だと思ってるの？」

その言葉に、優は少し不機嫌気味に眉根を寄せる。

“食い物の恨みが尋常じゃない魔人”という言葉が喉の奥まで出なかったが、何とかこらえた。

「パパがああの時間に帰った理由は分かってるもん。秀樹さんの帰りがあまりにも遅くなるのを防いだけでしょ？ 秀樹さん、何度かちらちら壁の時計見てたし」

確かに、優の言うとおりだ。

世間話をしている間にも、彼はちらちらと不自然に時計のある方を見やっていた。

気遣いの出来る彼の事だ。

これも菜々のため——と、なかなか別れを切り出せなかったのだろう。……悪い事をした。

啓輔は小さく苦笑を浮かべた。

「当たり。……よく分かったな？」

「私だって、いつまでも子供じゃないんだよ？ 人間観察くらい、どうって事ないもん！」

そこで優はえっへんと胸を張る。

いつもと変わらないその動作に啓輔はクスツと微笑んだ。

途端、優が頬を膨らませる。

「な、何よ！ また馬鹿にしてるの？」

「してないって。——いや、やっぱり変わってないな、って思っただけだよ」

「やっぱり馬鹿にしてる！」

少しは成長したかと思ったが、やっぱりまだまだ子供だな——なんて親心は、優には伝わらなかったようだ。

啓輔が車を発進させても、優の頬はまだ膨らんだままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4081z/>

沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

2011年12月29日00時52分発行